

美しい村づくり委員会
おいでん・さんそんセンター視察

愛知県豊田市足助町
平成31年2月3～4日

田口房国

2月3日

9:30

時間通りに役場前に集合し出発。

11:30

^{あすけちよう}足助町に到着。旅館玉田屋に先にチェックインをして荷物をおいてくる。足助は、戦前は宿場町として賑わっていたらしく、宿場の入り口である西町には7軒の宿屋があった。その中で唯一残っているのがここ玉田屋とのこと。女将さん曰く、築200年の家屋だそうだ。



11:45

今回のイベント会場である足助交流館隣にある参州楼でランチビュッフェ。「足助の野菜ビュッフェ」と看板で謳っているわりに、地元産の野菜はほとんどなかった（ひとつひとつの料理に産地が明記させている）。多分季節柄もあると思うが。

12:45 (足助交流館)

入場。高野先生にも挨拶。笹俣さんとも合流。これから何が始まるのか。実はあまり内容を分かっておらず。軽い二日酔いに加え、名刺入れも財布も家に忘れてきて、自分自身の準備不足を激しく感じている。

13:00

◆「平成30年度 いなかとまちのくるま座ミーティング 暮らしに生かす 自然のチカラ」おいでん・さんそんセンター主催。

センター長の鈴木辰吉さんの挨拶。

「今まで生きてきた人は、拡大していく社会しか経験していない。縮小していく社会を誰も経験していないのです。しかしマーケットが縮小していても、それでも人は幸せになれるはず。その光明を見つけましょう」

という趣旨の言葉にいきなりガツンとさせられる。そうか、今まで誰も経験したことがない時代を今まさに僕たちは経験してるんだ。だから今までの経験からくる成功体験なんて何ひとつあてに出来ないんだ。手探りでトライアンドエラーを繰り返しているんだ。そう思った。

◆オムニバストーク

センター長の挨拶が終わり、4人のゲストによる事例発表（オムニバストーク）。

コーディネーターは澁澤寿一^{じゆいち}氏。以下、発表内容は箇条書き。

① 久津輪雅^{くつわまさし}氏 岐阜県森林文化アカデミー 准教授

・グリーンウッドワーク・・・グリーンウッドとは「生木」を意味する。それを伝統的な手工具（大型の機械などは使わない）を用いて、割ったり削ったりして小物や家具を作るもの作り手法。

・イギリス、スプーンフェス。ひたすら斧でスプーンを作る。英ガーディアンズ誌「ヨーロッパのクリエイティブな静養先 ベスト10」に選ばれるくらい人気。

・日本の伝統的なグリーンウッドワーク・・・高山の杓子、加賀の我谷盆、北海道のアイヌ工芸など

・道具・・・削り馬

・様々な種類の木を流通させる仕組み

② 岩間^{たかし}敬氏 （一社）馬搬振興会 代表理事

・馬搬の国際大会（イギリス）で優勝。

・木曾馬を使用

・化石燃料を使わなくても馬がエンジン。

・馬が雪の中を走る映像は想像以上にスピードがあった。

・きっとすごい人なのだろうが、ギャグが寒く、あまり頭に入ってこなかった。

③ 井筒耕平氏 （株）sonraku 代表取締役

・様々なことが効率重視のもと「分業」化してきた→「集業（全部自分でやる）」してみたくなくなった。→やっぱり嫌になった。

・西栗倉ポリシー「**こだわらない」「結果は出せ」「オーナーシップ（自分ごと）」**

・村役場職員約30名→ベンチャーのよう

・**村役場がプランニング→民間にやらせる**

・起業約30社

・定住しなくてもいい。井筒氏自身、今は神戸に住んで、西栗倉と香川県に活動の拠点を持っている

・**人口流動をいかに前提にできるか。**←多くの自治体が「定住」を前提に取り組もうとするが、それではうまくいかない。

- ・「リソースファースト」から「やりたいことファースト」へ→村の資源を使う必要もない

- ・RE100・・・Renewable Energy 100% の略。再生可能エネルギー100%。
- ・木質バイオマス（熱、電気）→林業、林産業が地元にあるかどうかが大事。そうでないところが海岸沿いにプラントを作ってやっているのはどうかと思う。多分将来的に行き詰まる。

- ・sonraku のバイオマスは地域熱供給システム。
- ・平均値から外れるべき
- ・行政は毎年ごとのアップデートだが、民間は毎月アップデートできる

④ 清水潤子氏 猟師・ジビエカフェ Mui オーナー

- ・小澤庄一氏（元足助町助役 観光庁制定 観光カリスマ第1号）から、畑の周りに出没するイノシシをどうにかできないかと言われ、狩猟免許を取得。
- ・獲ったイノシシやシカを有効に活用できないかとジビエカフェをオープンする。
- ・罠はハコ罠、くくり罠。鉄砲。
- ・集落の求めに応じて駆除も行う。
- ・イノシシ、シカは山恵（^{やまけい}処理施設）へ。それ以外の小動物は自前処理施設で処理。



15 : 15

◆くるま座談義

分科会③に参加

テーマ：地域のエネルギーは自分たちでツクル

ゲスト：井筒耕平氏 話題提供者：松原俊介氏、萩原喜之^{よしゆき}氏

コーディネーター：村田元夫氏

- ・おいでん・山村センターのスモールビジネス研究会が主催
- ・sonnraku・・・エネルギー事業の売り上げは10～15%くらい
- ・バイオマスはレッドオーシャン。バイオ熱は成り立たない。敵は灯油。
- ・電気はマーケットが決まっている
- ・一般的に電力事業は労働生産性に優れている
- ・オフグリッド。自営線。

- ・水道の民営化
- ・欧州では集合住宅への熱供給→**日本でも、中山間地域にこそ集合住宅を作るべき**→そこにバイオ熱を供給する←LP ガスは高いので戦える(都市ガスは安くて戦えない)
- ・何のためにバイオマスをやっているのか？目的と手段を常に検証する。

〈その他の分科会〉

分科会①「木づかいで変わる暮らし」 ゲスト：久津輪氏

分科会②「馬・動物とともにある暮らし」 ゲスト：岩間氏

分科会④「ヘンタイが中山間地農業を救う！？」 ゲスト：清水氏

17:00

◆まとめの全体会

各分科会の内容が報告された。

センター長より「2012年、世界では地球1.6個分の消費が行われている。30年には2.0個分が必要となる。これは将来の資源を先食いしているものなので、いつかは破綻してしまう。いかにして地球1.0個分の消費に抑えるか。SDGsが目指すのはそこである。」

SDGs

2015年9月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」にて記載された2016年から2030年までの国際目標です。持続可能な世界を実現するための17のゴール・169のターゲットから構成され、地球上の誰一人として取り残さない（leave no one behind）ことを誓っています。SDGsは発展途上国のみならず、先進国自身が取り組むユニバーサル（普遍的）なものであり、日本としても積極的に取り組んでいます。（外務省HPより）

今回のシンポジウムで全体を通じて「SDGs」の言葉が端々で聞かれた。僕もここ半年くらいで急に様々な方面から耳にしているが、本当のところはよく

分かっていない。しかし、今後より多くの場面で耳にすることになるだろう。企業にとっても東白川村にとっても非常に重要な概念になり得るため、早急に理解する必要があると考える。

18:00 (井筒亀)

◆夜なべ談義

井筒亀(いづがめ)にて懇親会。参加者の多くは足助町、もしくは豊田市在住の人たちであった。司会の山本シゲさんから今回の東白川村からの視察についての紹介もあり、一言挨拶もさせてもらった。また、高野先生からも東白川村の取り組みについてお話ただけて、参加者の皆さんにも東白川村のことがかなり認知されたと思うし、村に行きたい!という声もたくさんいただいた。

隣席になった清水潤子さん、そしてさんそんセンターのキーマン山本シゲさんと東白川のメンバーとで二次会へ行き、交流を深めた。



2月4日

9:00 (足助支所内 会議室)

◆おいでん・さんそんセンターの取り組み

センター長 鈴木辰吉氏よりセンターの活動のレクチャー

センターは自ら独自の活動を行うというよりも、活動をしている団体が直面している課題（集客、地元の理解、企業とのマッチングなど）をフォローするために行政側から派生した団体。あくまで「中間支援」

- ・行政でも民間でもない団体
- ・数々の団体やプロジェクトが地元で、信頼され浸透できるように中間支援
- ・そもそもは 2000 年の東海豪雨をきっかけとして、合併後の豊田市は中山間地に大きな予算をつけ人口増加を図ったが、逆に人口減少が加速した。
- ・何か手を打たなければいけないということで、当時豊田市の総合企画部長であった鈴木氏が行政の出先機関として構想し、定年退職してセンター長となる。(3年後一社化)

- ・経済の拡大によって雇用を生んで地域を活性化する←このような従来型の考え方は拡大社会での考え方であり、ダメ
- ・合併、社会インフラの整備は人口減少と関係ない
- ・毎月1回プラットフォーム会議と理事会

・センターの取り組み・・・

▶□いなかとまちの交流コーディネート

- ・企業の社会貢献・研修 47事業
- ・大学や研究機関の調査など 22事業
- ・都市部市民の農業体験など 63事業
- ・山村部での起業支援など 25事業
- ・祭りの継承支援など 18事業

○「元気 Farm」人材派遣会社×営農組合

耕作放棄地を活用して農業を通じて人材育成。1反あたり100万円を企業からもらう。地元のお祭りにも参加。自分の会社、スキルを通じてこの地域に何かできないか自然に考えるようになる。

○「とよた里山猪肉カレーの発売」coco 壺番屋×足助高校×(株)山恵開発
ディスクバー農山漁村の宝 優良事例に選ばれる

○「トヨタ生協農業体験プログラム」トヨタ生協×稲武^{いなぶ}・旭地区

農家の高齢化により作付けはできても収穫が困難になっていた。1個140円(トウモロコシの市場売価)で収穫体験を企画し、自分でもぎ取ってもらう。人が来てくれることがやりがいとなり、5年続いている。

○「NPO法人マルベリークラブの桑栽培」NPO法人×営農組合

○「集落活動応援隊」ボランティア×高齢化集落

▶□いなか暮らし総合窓口

年間40世帯の子育て世代の移住をめざして

- ・空き家を内覧する「くらしの参観日」などの開催
- ・田舎くらしガイドブックの出版、HP、SNSによる情報発信
- ・「いなかとまちの文化祭」などの交流イベントの開催支援
- ・「空き家に灯りをプロジェクト」「いなか暮らし博覧会」の開催

・同じ豊田市の中でも都市部と山村部での人口の偏りがどんどん大きくなっている。→都市部から山村部へ（豊田市特有）職場は変わらずに住むところを変えたいというニーズ

・空き家への居住は圧倒的に賃貸が多い←その方が、移住がうまくいかなかった時にやり直せる。

・期限を区切って面接→子育て世代が入居。年寄り世代はほとんど落ちる。

○「空き家に灯りをプロジェクト」豊田信用金庫職員×小原地区の空き家

・「空き家片付け大作戦」

・メディア対策

・地元の人に空き家活用に関心を持ってもらう

・キャッチフレーズ「隣の家に明かりが灯った。何年ぶりだろう」

▶□「支え合い社会」の研究・実践

・地域スモールビジネス研究、山村起業の支援

・森の健全化に向けた「健康診断」、「半農半林塾」開催支援

・山村における営農の継続、食のあり方等の研究、講座

・人材育成事業支援、次世代育成に向けた研究など

○「^{とよもり}豊森なりわい塾」生き方を学ぶ人×山村集落

○「セカンドスクール」都市部小学生×都市農山村交流ネットワーク

○「畦道オープン」

○「女性ハンター清水潤子 ジビエカフェ mui」

○「てくてく農園」

○木の駅プロジェクト+あさひ薪研

▶□専門部会・・・地域スモールビジネス研究会、移住定住部会、森づくり部会、食と農部会、次世代育成部会、セカンドスクール部会

▶□センター5年で見えてきたもの

・都市と山村をつなぐ「中間支援」が必要

- ・移住者受け入れで山村地域の持続化は可能
- ・都市を都市らしく、山村を山村らしく磨き上げる
 - 今までは山村を都市に近づけるという考え方
 - 都市が嫌だから田舎に来る（景色、手業、祭り・・・）
 - 田舎を都市化してしまつては本末転倒
- ・活性化とは、安心できる暮らしが続くこと
 - 不安がなければ子供が生まれる
- ・持続可能性社会は都市を山村の支え合いから

2018年6月15日

SDGs 未来都市選定





11:00 (つくラッセル)

◆つくラッセル 視察とレクチャー

つくラッセル推進コンソーシアム代表機関 (株) M-easy 代取 戸田友介氏

- ・総務省「ふるさとテレワーク」補助金で廃校を改装
- ・何をするか、よりも、誰とするか
- ・場所を提供して様々な取り組みを行う
- ・休憩室、カフェ校長室、レンタルオフィス、オープン会議室、シェアオフィス、コワーキングスペースなど
- ・合唱団（主に移住者）
- ・地域スモールビジネス研究会・・・近況を話すだけだがそこからプロジェクトになることもある
- ・やさしい暮らし委員会・・・いろんな施設、団体のスケジュールを記した日めくり→折り込みで配布
- ・グランドはマレットゴルフ場
- ・里モビ活用工房・・・コムス（トヨタ製電気自動車の活用研究）



12:30

◆福蔵寺 シェアハウスの視察

- ・(株) M-easy が社宅として運営
- ・つくラッセルが出来る前はここで活動をしていた。
- ・個室のほか、共同スペース (居間)、お寺の管理も行う



13:10

◆ジビエカフェ mui でジビエ昼食

- ・昨日の清水潤子さんの営むカフェ
- ・鴨の唐揚げ、鹿のミネストローネ、猪ハンバーグの他、手作りランチをいただく。
- ・委員の小林のリクエストでカラスのアヒージョも食す
- ・清水氏の計らいで小澤庄一氏と会うことが出来た。

「君たちのような若者たちが楽しみと希望を持って取り組むということは、これからの東白川は期待できるところになるだろう」というような激励をいただいた。かなり高齢であるため、このタイミングでお会いできたことは嬉しかった。



14:30

◆猪鹿工房 山恵 視察とレクチャー

- ・ 昨年まで小澤庄一氏が代取
- ・ 猪鹿の生肉を買取り
- ・ 駆除期はお金を払わない
- ・ 施設補助金は様々な制約があるため使わない方がいい
- ・ 一般的な豚肉や牛肉に比べて、品質保証（全頭検査）などで競争力が劣る
- ・ 夏肉・・・フランク用、レストラン（低脂肪肉）
- ・ 冬肉・・・売店（3割）、イベント（3割）、販売（東京など3割）
- ・ イベントなどで宣伝（あまり積極的な営業は行っていない模様）
- ・ 地元にはほとんど売っていない。（もともと猟師が直接卸すなどしているため）
- ・ 残渣処理に関して昨年夏より急に行政の指導が入り、コストアップ→打開策を検討中
- ・ 加工品の販売（加工はOEM）・・・イノシシ餃子、シシ肉カレーなど



15:30

◆ちんちゃん亭 農家民宿の視察とレクチャー

- ・使命感としては農業だが、収入としては民宿が多い
- ・集落営農（約10町歩）の担い手として農業を始めたが収入が少なかったため、結婚を機に農家民宿も始める
- ・リフォームに2300万円をかけて随所にこだわった
- ・年間100組（自然派子育て世代の母子が多い）
- ・イベントはFBによる集客のみ
- ・泊まりに来た面白い人をイベント講師にしていく



◆最終考察

今回の視察で特に感じたこと3点をまとめる。

まず第一に、「中間支援」というものの必要性を認識した。同時に民間と行政の距離感、どのような関わり方が良いかも考えることができた。つまり、移住にしても地域での様々な活動にしても、末端の活動は民間の企業、団体、プロジェクトが行なうと良い。それは民間の方が活動の広がりやすさや細か

なアップデートが可能であるからで、その点行政は様々な制約や年度ごとでしかアップデートできない、または一度始めたらなかなか修正ができないからだ。しかし「資金」「信頼性」「外部へのコネクション」といった部分が民間の弱さだ。これを行政が補えると良い。ただ、継続的な中間支援を行なっていくことを考えると定期的な部署変更や適正人材の投入など役所仕事では収まらない業務ができてくる。なので豊田市では一社化し、行政と民間の両方の性質を持つ団体として「おいでん・さんそんセンター」を立ち上げた。また、西粟倉も役場が大まかなプランニングをするものの、それを民間に投げることで起業につなげていることが分かった。ここで強調しておきたいのは、立案は行政でも民間でも良いが、行政が末端の活動を行わないこと。その代わり行政は民間に伴走ながら不足しているものを補うこと。そのような関係性が必要であると感じた。

第二に、東白川村美しい村づくり委員会のいくつかのプロジェクトはこのタイミングに動き出して良かったなと認識したこと。その流れには当然今回参加したメンバーやその他のメンバーがいたからであり、それこそが東白川村にとって宝になるだろう。というのも、足助の人たちからは幾度となく「こんなに大勢で来るなんて、それだけでスゴイ！私たちよりスゴイ！」という言葉をいただいた。改めて考えるとそうかもしれない。みんなそれぞれ仕事もある大人が、もしかしたら何の得にもならないことに自分でリスクとコストを負って参加している。そういう人たちがいないと、結局地域づくりなどは頓挫するのだ。

第三に、SDGs の存在である。ここ最近出始めた感がある言葉だが、重要な意味合いを含んでいると僕は考えている。つまり今までそれぞれの自治体や企業、または個人が取り組んで来た「良い行い」というのは、二酸化炭素削減や持続可能なエネルギー、または各種フットプリントやフェアトレードなどのルールや取り組みがあったものの、それらを包括的にまとめて具体的な将来像を描くような概念はなかった。そういう意味でこの SDGs は、初めて地球上のあらゆる人があらゆる活動における指針を定めたものであると言っているのかもしれない。なぜそれが重要かといえば、僕たちがしている「良い行い」が仮に SDGs に沿わなかった場合、「良い行い」と見なされない

おそれがあるからだ。おそらくそのようなことはほとんどないと思われるが、同じことをやっても SDGs に則っているかどうかで大きく評価も変わってくるであろうことは容易に想像できるので、一刻も早い理解と実践が必要だと思う。

以上が特筆すべき 3 点として挙げる。ただ、今回参加した者が感じた細かな気付きなどは無数にあった。それは必ず今後の委員会やプロジェクトの活動、もしくは個々の活動に活かされることと思う。非常に内容の濃い、有意義な 2 日間であった。